

〔個人研究〕

学制期における女子の就学についての一考察

—旧埼玉県を中心に—

濱田 由美

はじめに

わが国の近代学校制度が、明治五年（一八七二）八月三日に頒布された「学制」により始まったことは周知の事実である。「学制」の大きな特徴の一つは学区制の採用であり、これによって全国が八つの大学区に分けられ、三二中学区毎に二一〇小学区を設けることで、五三、七六〇の小学校設立が目指されていた。「学制」頒布以降「教育令」・「学校令」と、短期間で大きな制度見直しが行われ、返されたが、当初より学校数は順調に増えており、

初年度の一、五五八校が、五年後には倍以上の二五、四五九校にまで増えている。学校数の増加に伴い就学率も確実に上がっており、「学制」頒布からわずか十年余りで学齢人口の約半数が学校に通うまでになっていた。もともと「学制」初期には、地域によって就学状況が大きく異なっていたことは記録により明らかであり、この背景には「学制」が、民費依存・受益者負担を前提としていたことも大きく関わっていたと思われる。

これまでも、近代学校制度に関する研究は数多く残されているが、倉沢剛の『小学校の歴史』^①

や、金子照基の『明治前期教育行政史研究』^②などのように、その多くは中央政府や各府県の政策を中心とした研究であった。また今回取り上げる埼玉県に關しても、工藤航平や笹森健などの成果はあるが、就学状況の違いやその背景についての研究が、十分に進んでいるとは思われない。

筆者は以前、現在の埼玉県行田市域である第十五区の就学状況について検討し、ここが同県内の他区に比べ女子の就学率が高い地域であることを明らかにした。^③埼玉県は、近世庶民の学習の場である寺子屋への就学に關して、概して女子の人数が少なかった場所といわれており、行田市域も例外ではなかった。そのため、「学制」頒布以降女子の就学率が高くなった理由として、明治以降にこの地でおこった変化、特に婦女子に關する変化が影響していたものと思われる。

行田市域がかつて足袋の製造で有名だったのは広く知られているが、その背景には綿の栽培や機械により、原材料の供給が可能であったとする、

地域的特徴が大きく関わっていたのは明らかである。さらに足袋の制作に携わっていたのは、主に士族の女たちと伝えられているが、機械りもまた婦女子の内職として広がっていた。これらの仕事は近世後期からおこなわれていたものの、盛んになったのは明治以降である。そのため婦女子が収入を得、家計の一端を支える存在となっていたことが、女子の就学率にも影響していたと思われるのであり、女子の就学率が高い背景として、「地域の産業や経済の影響が少なく」^④なかった可能性を示唆したが、明確な結論を得るまでには至らなかった。そこで今回は第十五区だけではなく、現在の行田市域である第十四区・十六区も視野に入れ、特に女子の就学率と地域産業との關係を中心に検討を試みることにする。

版籍奉還・廃藩置県を経て、明治四年一月に埼玉県は誕生しているが、現在の県域となるのは明治九年であることから、当時の県域に關しては旧埼玉県として区別する。明治五年三月に同県は

管内を二十四（後に二十五）に分けており、正副戸長が区内の中心的役割を担っていた。ここで取り上げる第十四区は、行田町をはじめとする武蔵国埼玉郡一五ヶ村二ヶ町、同じく第十五区は池上村をはじめとする埼玉郡一九ヶ村、さらに第十六区は持田村をはじめとする埼玉郡二〇ヶ村で構成されている。旧埼玉県では各区に学区取締が置かれ、区戸長と共に学事推進を図ることが目指されたが、第十四区は行田町の樋口利喜太郎、第十五区は北河原村の長谷川敬助、同じく第十六区は佐間村の山崎祥一郎が学区取締の役割を担っていた。ここでは長谷川敬助の残した記録に加え、『武蔵国郡村誌』⁷⁾なども参考に、当時の就学状況とその背景について考えてみたい。

一 旧埼玉県における「学制」期の就学状況について

「学制」初期における全国の就学状況を『文部

省年報』で確認すると、初年度の就学率は二八パーセントと低い値ではあるものの、年を経る毎に三二パーセント・三五パーセント・三八パーセントと確実に伸びており、明治一六年には五一パーセントと、わずか一〇年余りで学齢人口の半数が学校に通うまでになっている。さらに明治三五年には九二パーセントに達しており、就学率が九割を surpass するのに三〇年しか要していなかったのは明らかである。これらの記録によると、わが国の近代学校制度は短期間に広く普及したように思われるが、「学制」初期においては、府県別の就学状況に大きな差が生じていたのも事実である。明治九年の記録によると、就学率が高いのは東京を含む第一大学区であり、特に低かった福岡をはじめとする第五大学区の就学率は、全国平均よりも一〇パーセント近くも低い二八・六一パーセントに止まっていた。

当初「学制」では、全国を八つの大学区に分けている。翌年の見直しにより七大学区に変更して

いるが、今回取り上げる旧埼玉県は、第一大学区に含まれている。「学制」初期の同県における就学率は辛うじて全国平均を上回っていたが、同大学区内では茨城県に次ぐ低さであったことは（表1）からも明らかである。もともと、この時期は他県でも就学状況に大きな違いが確認されており、翌年西南戦争を引き起こす鹿児島県は、わずかに二〇・一パーセントの就学率と記録されている。就学率の違いが生じる背景には、さまざまな理由があると思われるが、高い地域が制度の普及を牽引すること、近代学校制度の定着拡大が図られたのであり、全国平均で就学率は確実に増加傾向を示し、

（表1）明治9年 府県別学齢人員中の就学率

大学区	府県	就学率(%)	大学区	府県	就学率(%)
第一大学区	東京	58・80	第四大学区	広島	28・86
	神奈川	50・12		岡山	45・06
	埼玉	39・86		島根	34・73
	群馬	50・00		山口	37・03
	千葉	42・63		愛媛	31・22
	茨城	36・85		(小計)	34・39
	橡木	49・11	第五大学区	長崎	26・05
	山梨	59・09		熊本	35・97
	(小計)	46・86		鹿児島	20・11
第二大学区	愛知	39・90		大分	35・31
	静岡	47・43		福岡	30・86
	石川	39・90		(小計)	28・61
	岐阜	50・34	第六大学区	新潟	31・19
	三重	35・18		長野	63・24
	(小計)	41・88		山形	35・84
第三大学区	大阪	58・83		(小計)	41・76
	京都	51・11	第七大学区	宮城	35・94
	滋賀	52・87		福島	50・16
	堺	47・58		秋田	18・04
	和歌山	23・91		青森	18・60
	兵庫	38・64		岩手	34・36
	高知	28・08		(小計)	32・32
	(小計)	41・23		全国平均	38・31

〔文部省第四年報〕より作成。

結果としてわずか十年余りで、学齢人口の約半数が学校に通うまになつてゐる。

旧埼玉県の就学状況を全国と比較したのが（表2）であるが、同県の数字が明治九年に大きく増

(表2) 全国及び埼玉県の学齢人口・就学児童数一覧

		学齢児童数(人)			就学児童数(人)			学 齢 児 童 中 の 就学者割合(%)		
		男	女	合計	男	女	合計	男	女	全体
全 国	明治6年	2,206,125	1,999,216	4,205,341	880,335	302,633	1,182,968	40	15	28
	明治7年	2,563,700	2,359,572	4,923,272	1,183,731	406,384	1,590,115	46	17	32
	明治8年	2,691,973	2,476,687	5,168,660	1,367,480	463,669	1,831,149	51	19	35
	明治9年	2,692,884	2,467,734	5,160,618	1,458,382	518,976	1,977,358	54	21	38
埼 玉 県	明治6年	35,518	34,414	69,933	11,874	2,568	14,442	33	7	21
	明治7年	36,763	35,854	72,617	17,351	4,216	21,567	47	12	30
	明治8年	38,199	36,456	74,655	21,667	5,392	27,059	57	15	36
	明治9年	70,903	65,407	136,310	42,292	12,035	54,327	60	18	40

『文部省年報』により作成。

えているのは、県域が変わったことに起因している。同県では「学制」導入から三年を経た明治八年以降、全国平均を上回る就学率を示しているが、男子に関しては一年前の段階で既に全国平均を超えていることから、女子の就学状況の低さが全体に大きく影響していたのは明らかである。もつとも同県が「埼玉県公私小学規則」^⑧を定め、本格的に制度導入を図ったのは、「学制」頒布から一年を経た明治六年八月のことであり、埼玉県で就学率が大きく伸びたのは、それ以降のことである。同県では二十四の区毎に設けられた公立小学校が、区内の学事に関する事務一般を取り扱うと共に、その学校を中心に、徐々に私立小学校を増設することで、学校制度の導入を図ろうと考えていた。今般各区江本校相設ケ、其区之事務取扱ニ付、学事関係之願・届共、総而本校江可申出候也、各区の中心となる公立小学校の開校は、急ぎ進められたと思われるが、いずれも明治六年迄に開校していたことは(表3)により明らかである。

(表3) 埼玉県24区公学本校一覧

区 番	学校名	開校年	区 番	学校名	開校年
第1区	草加学校	明治5年	第13区	羽生学校	明治5年
第2区	啓明学校	明治6年	第14区	荒井学校	明治5年
第3区	芳川学校	明治6年	第15区	池上学校	明治5年
第4区	松伏学校	明治6年	第16区	持田学校	明治6年
第5区	粕壁学校	明治5年	第17区	鴻巣学校	明治6年
第6区	鷄鳴学校	明治6年	第18区	興川学校	明治5年
第7区	幸手学校	明治6年	第19区	上尾学校	明治5年
第8区	栗橋学校	明治6年	第20区	岩槻学校	明治5年
第9区	久喜学校	明治6年	第21区	大宮学校	明治5年
第10区	騎西学校	明治6年	第22区	浦和学校	明治5年
第11区	加須学校	明治6年	第23区	蕨 学校	明治5年
第12区	不動岡学校	明治6年	第24区	鳩ヶ谷学校	明治6年

『文部省第二年報』より作成。

二 第十五区の就学状況について

近世における埼玉県内の就学状況を、明確に伝える記録は残されていないが、武州埼玉郡野村（現、行田市野）の寺子屋玉松堂には、安政五年（一八五八）三月から、明治四年までの登山者（入学者）を記した「門入証文帳^⑩」が残されている。この寺子屋は、年若くして名主役を引き継いだ甥傳之助を後見するため、江戸から帰郷した植田音次郎（正員）が始めたものであり、残された「門入証文帳」には、総勢二〇八人の筆子（就学者）の名前が記されていたが、その中で確認出来る女子の名前は一人に留まっている。県内には他にも多くの寺子屋が存在していた事は、『埼玉県教育史』^⑪に残された「寺子屋一覧」などにより明らかであるものの、就学者数が確認出来る寺子屋は決して多くはなかった。記録が残されている寺子屋の中には、比較的沢山の子供たちが通っていたとされる、南埼玉郡白岡町の大野雅山が師匠

学制期における女子の就学についての一考察

を務めた寺子屋の、総勢三八三人の筆子の内女子が四〇人、同じく所沢市北野村の沢田泉山が営んでいた寺子屋北広堂の七〇九人の内女子が一七一人など、玉松堂よりはるかに女子の割合が多い寺子屋も確認されているが、概して女子の就学者は少なかつたと思われる。

明治五年に「学制」が頒布された以降の、旧埼玉県における各区の就学状況を明らかにしたのが次の表である。

下の表により、第十五区では就学者における女子の割合が突出して高

(表4) 旧埼玉県内の就学人数と女子の割合

区番号	明治7年				明治8年			
	男	女	合計	女子の割合	男	女	合計	女子の割合
1	1,019	472	1,491	32	1,023	415	1,438	29
2	608	131	739	18	690	194	884	22
3	713	153	866	18	874	198	1,072	16
4	650	102	752	14	687	103	790	13
5	673	135	808	17	739	149	888	17
6	661	135	796	23	785	84	869	10
7	952	313	1,265	25	822	292	1,114	26
8								
9	561	103	664	16	687	121	808	15
10								
11	548	68	616	11	887	127	1,014	13
12								
13								
14	1,421	463	1,884	25	1,503	519	2,022	26
15	683	349	1,032	34	745	375	1,120	34
16								
17	908	205	1,113	18	1,037	188	1,225	15
18								
19								
20	725	122	847	14	822	159	981	16
21	886	199	1,085	18	1,017	250	1,267	20
22	888	227	1,115	20	1,047	278	1,325	21
23	883	293	1,176	18	907	307	1,214	25
24	771	194	965	22	760	166	926	18

『文部省年報』より作成。(記録に欠けのある区に関しては空白とした。)

(表5) 第15区の就学・不就学表

村名	就 学				不 就 学(人)			学齢人口(人)
	男(人)	女(人)	小計(人)	女子の割合(%)	男	女	小計	合計
池上村	22	17	39	46	1	12	13	52
馬見塚村	24	4	28	14	4	21	25	53
下池守村	15	1	16	1	3	6	9	25
中里村	31	11	42	26	3	5	8	50
皿尾村	15	5	20	25	1	4	5	25
小敷田村	13	5	18	28	6	5	11	29
上中条村	93	50	143	35	32	53	85	228
小曽根村	19	5	24	21	16	19	35	59
大塚村	12	10	22	45	4	4	8	30
南河原村	65	64	129	50	2	23	25	154
北河原村	51	26	77	34	25	35	60	137
犬塚村	47	0	47	0	1	3	4	51
中江袋村	12	9	21	43	5	6	11	32
下川上村	36	11	47	23	5	15	20	67
上池守村	22	9	31	29	10	7	17	48
合計	477	227	704	32	118	218	336	1040

「小学年生人員其外取調帳」より作成。

かったことが明らかとなっており、第十五区の学区取締であった長谷川家に残された記録、「小学年生人員其外取調帳」(明治七年六月)からも、同様の事実が確認されている。

『埼玉県区分銘鑑』^⑬によると、第十五区は池上村・上池守村・下池守村・皿尾村・中里村・大塚村・犬塚村・上之村・南河原村・中江袋村・上川上村・下川上村・上中条村・北河原村・小曽根村・今井村・箱田村・馬見塚村・小敷田村の、武蔵国埼玉郡一九ヶ村で構成されていた。(表5)には上之村・上川上村・今井村・箱田村の記録が欠けているものの、就学者における女子の割合については、『文部省年報』の記録と大きく異なっていないことから、長谷川家に残された記録は当時の様子を明確に伝えていると思われる。(表5)によると、第十五区においては就学者の三割以上が女子であり、女子の学齢人口の内四割が学校に通っていたと思われる。また同記録に残された区内の学齢人

(表6) 第15区 学校別就学者表

学校名	明治7年			明治8年		
	男(人)	女(人)	女子の割合(%)	男(人)	女(人)	女子の割合(%)
池上	92	29	24	100	65	39
上中条	98	40	29	123	36	23
上川上	36	29	45	47	32	41
南河原	64	53	45	80	76	49
箱田	30	27	47	28	25	47
上之村	94	76	45	97	57	37
今井	65	25	28	71	31	30
北河原	51	32	39	53	23	30
犬塚	48	3	6	52	4	7
馬見塚	54	13	19	47	9	16
中里	51	22	30	47	17	27

『文部省年報』より作成。

口一、五〇四人(男八三七人・女六六七人)、就学者一、〇五一一人(男六八四人・女三六七人)からは、就学率がさらに高くなり、男子は八〇パーセント、女子は半数以上が学校に通っていたものと思われる。明治七年の段階では、全国平均で女

子の就学は、学齢人口の一七パーセント、旧埼玉県においては一二パーセントと(表2)に記録されており、第十五区における女子の就学率が突出して高かったのは明らかである。さらに、第十五区内の学校別就学状況を明らかにしたのが次の表である。

第十五区では、大半の学校で就学者における女子の割合が高かったと記録されている一方で、突出して女子の割合が低かったと記録されていたのが犬塚小学校である。確かに女子の就学者は明治七年に三人、翌八年には四人と決して多くはないものの、(表5)の「就学・不就学表」によると、主に同校に通っていたと思われる犬塚村では、この時点で三人しか学齢期の女子が確認されていなかった。そのため、男女の人数格差が就学者における女子の割合を下げたのであり、第十五区が総じて女子の就学者の多い地域であったのは明らかである。

第十五区で就学者における女子の割合が高かつ

(表7) 第15区の人口・物産表

村名	人 口 (人)			物 産					
	総人口	男	女	米(石)	大麦(石)	小麦(石)	大豆(石)	白木綿(反)	縞木綿(反)
池上村	344	161	183	663	214	75	60		
馬見塚村	384	99	185	395	300	27	140	500	
下池守村	196	107	89	298	140	20	51		
中里村	317	166	151	647	17	18			
皿尾村	191	92	99	549	33	6	23		
小敷田村	239	131	108	540	108	33	35		
上中条村	920	461	459	1,688	488	103	50		
小曽根村	279	135	144	312	185	195	53	22	
大塚村	204	107	97	509	69	11	15	690	
南河原村	1,056	534	522	713	787	87	394	300	125
北河原村	903	439	464	296	741	404	638	220	
犬塚村	450	223	227	600	295	25	84		
中江袋村	206	98	108	380	67	21	41		
下川上村	506	263	243	867	120	60	74		
上池守村	322	160	162	612	92	39	68		
今井村	636	316	320	603	555	34	161	150	70
箱田村	341	159	182	385	112	82	69		
上之村	1,324	549	775	2,444	725	102	77	550	780
上川上村	402	200	202	160	41	90			

『武蔵国郡村誌』より作成。

(物産における米・大麦・小麦・大豆の収穫量については、石以下を切り捨てとした。)

た背景には、同区内における明治以降の社会変化が、大きく影響していたと思われる。旧埼玉県では現在も行田市域だけではなく、川口・蕨を含む第二十三区も、婦女子の内職とされる綿織物の盛んな場所であったと記録されており、共に就学者における女子の割合が高かったことは、

(表4)からも明らかである。

同区における、人口及び物産の記録を一覧にしたのが次の表である。

これは、『武蔵国郡村誌』に記載されている各町村の物産から、主要農産物と思われる米・大麦・小麦・大豆の他に、白木綿・縞木綿の生産高を抜粋して作表したものである。ちなみに縞木綿は、藍で染められた糸で織られた木綿である。

上の表により第十五区では、米だ

けではなく畑作も盛んであったのは明らかであり、米は一人値一・三七石、大麦は〇・五五石収穫されていた。さらに機織りがおこなわれていた村も多く、婦女子の内職が区内に広がっていたと思われることから、経済の安定と婦女子の内職の実態が、子供たちの就学にも大きく影響していたと思われる。

三 第十四区・十六区の就学状況について

第十四区は、行田町・成田町・長野村・和田村・酒巻村・谷郷・斎条村・下中条村・須加村・上新郷・下新田・小針村・下須戸村・若小玉村・荒木村・白川戸村・小見村の、武蔵国埼玉郡十五ヶ村二ヶ町で構成されていた。この区の「学制」初期

(表8) 第14区の就学者表

学校名	明治7年			明治8年		
	男(人)	女(人)	女子の割合(%)	男(人)	女(人)	女子の割合(%)
荒木	118	72	38	128	57	31
成田	65	15	19	65	18	22
北谷	83	54	39	80	60	43
行田	51	27	35	125	100	44
行田北	77	39	34			
長野	106	42	28	115	45	28
若小玉	58	10	15	57	10	15
小針	60	7	10	64	7	10
下須戸	70	20	22	72	20	22
下新田	42	10	19	67	15	18
下新郷	73	18	20	92	18	16
須加南	72	8	10	71	9	11
須加北	52	5	9	60	5	8
中條	61	15	20	61	15	20
斎条	62	11	15	66	19	22
酒巻	33	17	34	27	26	49
荒木	155	30	16	155	30	16
小白	70	13	16	74	19	20
和田	43	20	32	43	20	32
谷郷	70	30	30	81	26	24
合計	1421	463	25	1503	519	26

『文部省年報』より作成。

における学校別就学状況を明らかにしたのが次の表である。

成田町は明治六年に忍城跡地の他、組屋敷・足軽長屋などを含め成立した町であり、住民の大半は士族であったとされる。また隣接地である行田

町にも、数は少ないながらも士族の居住が確認されており、成田町及び行田町を通学区とする荒木・北谷・成田・行田の各校で、就学率が高かったのは（表8）により明らかである。成田町及び行田町では、この時期足袋の生産が盛んにおこなわれており、この作業は主に士族の婦女子が携わっていたと伝えられている。また、第十四区の各町村における明治初期の人口及び物産を、『武蔵国郡村誌』を参考に作成したのが（表9）であるが、ここには両町の農業生産の記録は残されていないものの、その他の村では多くの農作物の収穫があったことは、記録により明らかである。平均すると一人値米が〇・七九石、大麦が〇・五七石などとなっているが、人口の多い成田町・行田町の人口も加えた平均値であることから、農業生産に適した地域であったのは明らかである。

（表9）第14区の各町村における人口及び産物表

町名	人 口（人）			物 産						
	総人口	男	女	米(石)	大麦(石)	小麦(石)	大豆(石)	白木綿(反)	絹木綿(反)	白・紺足袋(足)
行田町	3,200	1,627	1,573							89,550
成田町	5,092	2,593	2,499							11,800
長野村	1,734	852	882	2,796	1,700	381	686	1,500	450	
和田村	300	148	152	436	224	48	139	100	500	
酒巻村	429	231	208	752	25	28	44	75		
谷郷	928(927)	471	456	1,000	253	30	3		1,500	
斎条村	824	416	408	1,125	752	180	230	450	650	
下中条村	622	317	305	451	536	96	159	600	280	
須加村	1,365	704	661	1,854	1,424	300	593	600		
上新郷	1,770	885	885	1,917	2,280	190	795	217	350	
下新田	407	203	204	320	500	20	55	900		
小針村	862	438	424	805	927	120	450			
下須戸村	1,030	515	515	1,440	800	90	270			
若小玉村	909	463	446	1,824	910	76	350			
荒木村	1,542	790	752	1,380	950	180	350	200		
白川戸村	414	223	191	370	492	82	172			
小見村	509(498)	255	243	756	813		254	500		

『武蔵国郡村誌』より作成。

（物産における米・大麦・小麦・大豆の収穫量については、石以下を切り捨てとした。）

内務省の通達により、明治初期における各町村の実態調査が全国規模で実施されたものの、その多くは関東大震災の際に灰燼に帰し、唯一残った記録を編纂したのが『武蔵国郡村誌』である。ここには明治初期の埼玉県内の各町村における貴重な記録が残されており、年度を定めた記録とはいえないものの、人口に関しては明治九年一月一日を基準とすることが定められていた。

行田町においては、「男女商法を専らとし婦女子は傍ら裁縫を営みて農桑を業とする者なし」と記されている。ここでも足袋が主力産業となっていたのは（表7）からも明らかであり、婦女子も家計を支える一翼を担っていたのは、成田町と同様である。第十四区でも第十五区同様、就学者における女子の割合が高い学校が少なくなかった背景には、士族の居住が多いことに加え、婦女子の仕事とされる足袋・機織りなどが盛んにおこなわれていたことが大きく影響していたと思われる。

第十六区は、持田村・前谷新田・戸出村・平戸

村・太井村・棚田村・門井村・新宿村・鎌塚村・下忍村・袋村・堤根村・樋上村・佐間村・埼玉村・渡柳村・和田村・野村・広田村・屈巢村の埼玉郡二〇ヶ村で構成されていた。

次に示した表は、同区における人口・物産の記録を一覧にしたものである。ここからは同区の機織りが、一部の村で集中的におこなわれていたことが明らかとなっている。

次の表によると、米だけではなく総じて農産物の生産量が、前の二区に比べ少なかったのは明らかであり、一人値米が〇・七八石、大麦は〇・四四石に留まっていた。さらに機織りに関しても、埼玉村・野村・屈巢村に集中しており、その他の村ではほとんど実施されていないことから、総体的に経済的なゆとりが乏しい地域であったと思われる。また『武蔵国郡村誌』によると、最も機織りが盛んであったと思われる埼玉村について、地味は「黒赤の薄土交互せる瘦地なり、稲麦他に比すれば稍劣るも、菽豆蕎麦瓜茄の類には適応せり、

(表10) 第16区の各村における人口及び物産表

村名	人 口(人)			物 産				
	総人口	男	女	米(石)	大麦(石)	小麦(石)	大豆(石)	白木綿(反)
持田村	1,314	674	640	1,616	312	56	39	5
前谷新田	243	117	126	583	45	14	6	
戸出村	261	144	117	330	140	25	26	
平戸村	311(319)	159	160	575	186	45	30	
太井村	426	211	215	231	334	72	237	
棚田村	256	122	134	386	16	15	93	
門井村	265	126	139	115	178	60	127	
新宿村	283	142	141	481	148	30	77	150
鎌塚村	515	251	264	360	319	45	42	
下忍村	1,052	533	529	480	332	78	13	
袋村	433	206	227	461	473	28	142	
堤根村	422	204	218	297	181	27		
樋上村	197	94	103	390	145	35	40	160
佐間村	1,014	515	499	1,091	48	26	4	300
埼玉村	1,158	606	552	346	459	168	287	2,000
渡柳村	490(473)	239	234	82	(82)	75	65	200
利田村	242	127	115	250	90		50	
野村	793	408	385	340	730	260	35	1,200
広田村	1,302	658	644	476	105	110		
屈巢村	1,715	855	860	1,071	1,228	444		1,190

『武蔵国郡村誌』により作成。

(物産における米・大麦・小麦・大豆の収穫量については、石以下を切り捨てとした。)

而して水旱の患^⑮は少なくなかつたと伝えられており、同村では田畑からの収穫が十分に見込めない状況の中、機織りによる収入が大きく家計を支えていたと思われる。もつとも前にも述べたとおり、副業としての機織りが盛んであったのは、区内の限られた村に過ぎず、区内で広くおこなわれている状況には無かったと思われる。

また、第十六区における学校別就学状況を一覧にしたのが次の表である。

第十六区内の学校で、ひときわ女子の就学者が多かったと記録されているのが佐間小学校である。

『武蔵国郡村誌』によると、同村の地味は「水田は赤黒埴土、陸田は青赤色、稲麦に宜しく、又桑茶

(表11) 第16区の就学者表

学校名	明治 7 年			明治 8 年		
	男(人)	女(人)	女子の割合 (%)	男(人)	女(人)	女子の割合 (%)
持田	99	30	23	104	25	19
下忍	107	10	9	214	61	22
埼玉	87	16	16	74	12	14
佐間	57	38	40	79	48	38
屈巢	76	5	7	62	5	7
棚田	71	4	5	76	9	11
廣田	66			51	13	20
野村	61	4	6	71	4	5
平戸	42	13	24	42	2	5

『文部省年報』より作成。

に適す、水利不便、時として水旱共に苦しむ¹⁶⁾とあり、米の栽培に適した土地であつたことは、(表10)の記録からも明らかである。畑作物に関してはあまり収穫は多くはなかつたと思われるが、機織りもわずかながら実施されていた。就学者における女子の割合が少ない学校の一つ

として、野村小学校が記録されている。野村は、かつて寺子屋玉松堂があつた場所である。『武蔵国郡村誌』によると、地勢は四方平坦で荒川・行田道により運輸便利な場所とされるが、地味は「赤色砂を帯ふ、其質下等にして稍稲麦に応し、茶も亦適せり、水利は不便にして、水旱の患多し¹⁷⁾」と伝えられている。記録によると、米よりも畑作が中心であり、機織りも盛んに行われていた村であつたと思われるが、寺子屋玉松堂の「門入証文帳」に残された記録により、近世における女子の就学率が低い地域であつたのは明らかである。また、同じく女子の割合が少ない屈巢小学校があつた屈巢村でも、内職としての機織りが盛んにおこなわれていたのは明らかであるものの、前の「門入証文帳」によると、玉松堂の筆子の中で、野村の次に多く通つていたのが隣接地の屈巢村からであつたのは明らかである。農業生産力の低さを機織りが補う状況にありながらも、両村とも依然女子の就学率が低いままであつた背景には、近

世における住民意識や地域性がこの時期は未だ払拭されずに残っていたことが、女子の就学率にも大きく影響したと思われる。

四 北足立郡の就学状況

明治一八年の記録ではあるが、埼玉県内の織物生産についての記録が残されており、一覧にしたのが次の表である。

埼玉県内で綿織物が盛んであったのは、北足立郡及び南・北埼玉郡であったことは右の表からも明らかである。現在の行田市域となる第十四区から十六区にかけて、綿の織織りが盛んであった地域の就学率、特に就学者における女子の割合が高いことは既に述べたが、北足立郡、現在の蕨市・山口市を含む地域となる第二十三区における就学状況も、決して悪くなかったことは（表4）により明らかである。

北埼玉郡で織織りが盛んとなった背景には、綿

（表12）埼玉県織物産額表

郡名	絹織物		絹綿交織物		綿織物	
	反	価(円)	反	価(円)	反	価(円)
北足立			24,033	16,823	345,698	207,418
新座			876	613	30,488	18,292
入間	17,957	25,867	55,582	45,915	200,440	71,700
高麗	12,462	24,052	34,360	25,973	90,965	47,703
比企	30,000	33,000			7,000	1,750
横見					1,000	250
秩父	46,000	64,400				
児玉	10,004	15,153	130	104	518	362
賀見	4,768	3,436	700	560	730	511
那珂	10,270	7,555	459	367	2,657	1,859
大里	2,614	2,224	2,862	1,717	4,727	1,891
幡羅	3,798	3,193	3,046	1,828	4,232	1,693
榛沢	62,786	51,908	4,114	2,468	5,691	2,276
男衾	23,550	11,392	1,290	774	2,162	865
北埼玉					208,878	123,678
南埼玉					213,090	44,616

「埼玉県織物産額」より作成。

の栽培が盛んであったことが大きく影響していたと思われるが、北足立郡の場合は、塚越村（現蕨市）在住であった高橋新五郎が、「文政八年（一八二五）に新しい織機の高機を發明し」^⑮青島の生産をはじめたことが大きく影響していたと伝えられている。

また、『武蔵国郡村誌』では川口町について、「男は鋳物を専らとし、農商之れに亞ぐ、女は農耕を専とす」^⑯と記されているが、鍋・鎌・鋤・鍬などの他に、青縞や足袋の制作がおこなわれていた。同じく蕨宿についても「男は農商工を業とし、女は稼穡を専とし、傍ら紡織を業とす」^⑰とあり、共に農産物だけではなく広く産業が盛んな地域であったと思われる。同区の学校別就学状況を一覧にしたのが次の表であり、川口・蕨両小学校が、就学者における女子の割合が高い学校であったのは明らかである。

（表13）第23区の就学者表

学校名	明治 7 年			明治 8 年		
	男子	女子	女子の割合	男子	女子	女子の割合
蕨	143	77	35	206	103	33
美女木	136	16	11	133	19	13
川口	74	57	44	100	76	43
元郷	99	26	21	89	19	18
根岸	90	34	27	15	20	57
小淵	71	17	19			
横曽根	59	18	23	61	14	19
青木	58	18	24	65	11	14
笹目	59	16	21	60	17	22
新曽	51	4	7	50	6	11
芝村	43	10	19	56	12	18
前田				72	10	12

『文部省年報』より作成。

おわりに

日本で初めての近代学校制度となる「学制」が、民費依存・受益者負担を前提としながらも、当初より多くの人々に受け入れられていたことは、文部省の年報などからも明らかである。初年度は全国でわずか一二、五五八校しかなかった学校数が、五年後には二五、四五九校と倍以上に増えている。また学校数の増加に伴い初年度は二八パーセントだった就学率が、年を経る毎に三二パーセント・三五パーセントと増えており、明治十六年には学齢人口の約半数が学校に通うまでになっている。もともと「学制」初期の府県別就学状況には、大きな差が生じていたことは記録により明らかである。明治九年の記録によると、東京府では約六割が学校に通っていた一方で、青森県ではわずかに二割を切っていた。同様の現象は各県単位に限られた範囲の中でも確認できることから、ここまでは一つの例として埼玉県の就学状況を明らかにす

ると共に、その背景について考えることを目的とした。

埼玉県は近世寺子屋の時代から、女子の就学率が低い場所といわれている。南埼玉郡白岡の、大野雅山が師匠を務める寺子屋や、所沢市北野村の沢田泉山の寺子屋北広堂のように、女子の就学者が多い寺子屋も確認されているが、埼玉郡野村の寺子屋玉松堂では、総勢二〇八人の内、女子と確認出来る人数は、一人だけであった。ところが「学制」導入後の行田市域は、突出して就学者における女子の割合が高い事実が明らかとなっている。この背景には、明治以降のこの地における変化、特に婦女子を取り巻く環境の変化が大きく関わっていたと思われる。

行田は足袋の産地として広く知られている。ここでは近世初期より綿の栽培が盛んであり、機織りもおこなわれていた。白木綿や藍染めの糸で織られた綿木綿などが沢山作られていたことが、足袋の製造につながっていたのは明らかである。綿

の機織りは婦女子の内職として広がっており、足袋の製造は主に士族の女たちが関わっていたと伝えられている。わずかな金額であっても女たちが現金収入を得、家計を支える一翼を担う存在となったことが、女子の就学率に影響したのではないかと考えた。さらに旧埼玉県内で、同じく綿の機織りが盛んであったと伝えられる蕨・川口を含む第二十三区でも、女子の就学率が高かったことは記録により明らかである。このような事実を参考に、機織りが盛んな地域である現在の行田市域における女子の就学に注目して、近代学校制度の導入状況について検討を試みた。

第十四区では士族が集住する行田・成田の両町で、多くの足袋が製造されていたことが明らかとなっている。また、士族の子弟が通学していたと思われる学校では、女子の就学者が多かったことも確認されている。さらに同区では、米だけではなく畑作物も豊富に作られており、内職も盛んであったことから、比較的経済が安定した地域で

あったと思われる。さらに第十五区でも農作物の生産が盛んであり、加えて白木綿・縞木綿の生産もおこなわれていたことから。経済的に安定した地域であったのは明らかである。第十四・十五区で女子の就学率が高かった背景には、士族の存在に加え、経済的安定が大きく関わっていたと思われるのであり、ここでは女子の内職も、就学率に多少の影響を及ぼしていたと思われる。

もっとも、第十六区では内職が盛んであった村でも、女子の就学率が低い状況が続いていた。野村は寺子屋玉松堂があった場所である。残された「門入証文帳」には、安政五年から明治四年までの記録が残されており、「学制」が導入される直前まで、庶民の学習の場であったのは明らかである。この「門入証文帳」には、女子の就学者はわずかしが記録されていなかった。近代学校制度が導入された後も依然として女子の就学率が低い状況が続いていたことから、第十六区は未だ近世における住民意識・地域性が払拭されることなく色

濃く残った地域であったと思われるのであり、このことが女子の就学にも影響したのは明らかである。明治初期においては、近代国家を目指し世の中が大きく変わろうとしていた一方で、末端の人々の意識や生活が急激に変わらない場所も少なくはなかったと思われるのであり、結果として女子の就学にも近世の影響が未だ大きく残されたと思われる。

「学制」が導入されて以降、全国的には学校数や就学率が順調に増加していたものの、実際には地域により状況は大きく異なっていた。明治九年の記録では、東京府が六割近い就学率を誇る一方で、秋田・青森は二割に達していないなど、その隔たりは決して小さなものではなかった。もっとも、このような状況の中でも平均すると、わずかな十年余りで就学率は五割を超し、三〇年で就学率が九割を超している。この背景には就学率の高い地域が全体の就学率を牽引する役割を果たしたことで、結果として学校制度が全国に普及したので

あり、近代学校制度が導入されてから現在に至るまで、見直しを繰り返しながらも滞ることなく続いていた制度の第一歩となった「学制」が、確実に導入を果たした意義は決して小さなものではなかったと思われる。

旧埼玉県の「学制」初期における特徴が、現在の行田市域で女子の就学率が高いことであった。近世においては概して女子の就学率が低い場所とされていたことから、明治以降この地で盛んとなった婦女子の内職である綿織物と就学率の関係を中心に、「学制」初期の様子を見てきたが、土族の存在と経済的状況が、就学率に大きく関係していたとは思われるものの、女子の就学率を高めた背景が、内職普及だけでなかったのは明らかである。住民意識や地域性が、時には就学率の上昇を抑制する場合があることも視野に入れ、今後「学制」初期の就学状況について考えてみたい。

註

- (1) 倉沢剛『小学校の歴史』I、IV、ジャパンライブラリービューロー、一九六三〜七一年。
- (2) 金子照基『明治前期教育行政史研究』、風間書房、一九六七年。
- (3) 工藤航平『近代小学校の成立過程と地域社会』（『埼玉県立文書館紀要』20号、二〇〇七年）。
- (4) 笹森健『埼玉県における小学校設立過程についての一研究』（『青山大学教育学会』『教育研究』15号、一九六九年）。
- (5) 濱田由美『近代学校制度導入期における学校設立と就学率についての一考察』（『佛教文化学会紀要』第25号、二〇一六年）。
- (6) 【前掲書】。
- (7) 『武蔵国郡村誌』第十三卷、雄文閣、一九五五年。
- (8) 『埼玉県公私就学規則』（『埼玉県立文書館所蔵文書』）。
- (9) 埼玉県立文書官所蔵文書。
- (10) 『門入証文帳』（『植田家文書』、行田市郷土博物館所蔵文書）。
- (11) 埼玉県教育委員会『埼玉県教育史』第一卷、一九六八年。
- (12) 『小学年生人員其外取調帳』（『長谷川家文書』、埼玉県立文書館所蔵文書）。
- (13) 『埼玉県区分銘鑑』（『新編埼玉県史』資料編19附録、ぎょうせい、一九八三年）。
- (14) 『武蔵国郡村誌』第十三卷、雄文閣、一九五五年。
- (15) 【前掲書】。
- (16) 【前掲書】。
- (17) 【前掲書】。
- (18) 川口市『川口市史』通史編 上巻、ぎょうせい、一九八八年。
- (19) 『武蔵国郡村誌』第一卷、雄文閣、一九五三年。
- (20) 【前掲書】。

